

夢

南部修太郎

青空文庫

五月のある晴れた土曜日えうの夕方がただった。いつになく元きのいい、明るい顔かほつき付つとで勤め先から帰かへつて、M会社くわいしやあん社員の青木さんは、山の手てのある静しづかな裏通りうらとほにある我家わがやの門口かどぐちをはひると、今いまで胸むねに包つんでゐたうれしさを一時じに吐はき出すやうにはしやいだ声こゑで奥おくさんの名なを呼よんだ。と奥おくさんはびつくりした様子やうで小走はしりにそこへ迎むかへ出でた。

「お帰かへんなさい。——いつたいまあ何なんなの？ いきなりそんな大きな声こゑをなすつて……」

さうたづねかけながら、奥おくさんは女学がくせい生せいらしきのまだ十分にぬけきらない若わか々くしいひとみを青木あおきさんに投なげかけた。

「いゝ事、こと 素適すてきな事ことがあるんだよ。」

さう答こたへて 玄げん 関くわん にあがると、機嫌きげんのいい時ときにするいつもの癖くせで、青木さんは小柄がらな奥おくさんの體からだを軽かるく引ひき寄よせながら、そのくちびるに短みじかい接せつぶんを與あたへた。

「まあ、何なんんでせう？」

奥おくさんはたくましい青木さんの肩かたに片手かたてをかけたまゝこびるやうにその顔かほを見上みげた。

「うむ、あれさ。あれをとうとう今日う受けとつて たんだよ。」

「あれつて？」

「ほら、あれさ。」

「ああ、わかつた。うれしいわね。——どんな番号がうだつて？」

「それがさ、馬ばかによささうな番号がうなんだよ。——ちよつとお待まち……」

さういひながら、玄げん関くわんつゞきの茶ちやの間まへはひると、青木あおきさんは紙かみにくるんだ額がくめん面十円の△△債券さいけんを背広せびろの内うちがくしから、如何いかにも大事じさうに取出とりした。

「これなんだよ。——ほらね。ちの一万二千三百七十五号がう、何なんだかいゝ番号がうだらう？」

「ちの一万二千三百七十五号がう、さうね、ほんとにいゝ番号がうだわ。」
奥おくさんは晴はれ晴ばれしくひとみを輝かしなやがら、暫しばらくその額がくめ面めんに眺ながめ入なつてゐた。

「何なんだかあたりさうね。」

「さうなんだ。僕はその番号を一目見た時、直感的にさう思つたね。」

青木さんは興奮した声でさう相づち打つた。

「あたつたら、実際素適だな。」

「素適以上だわ。——一万二千三百……」

「……七十五号。第一、五がつくのなんて半端な処がなくて馬にいいよ。」

「さうね。ちの一万二千……」

青木さん夫婦はこの頃には張りのある、明るい持で、希望と信頼の笑顔を互にちつと見交し合つた。

従兄妹同志で恋し合つて、青木さんの境遇にすれば多少早

過ぎもしたのであつたが、互たがひに思おもひつめた若わか々々しい熱ねつ情じやうのままに思おもひ切きつて結けつ婚こん生せい活くわつにはいつた二人は、まる三年間さんかを《へ》たその頃ころになつて、可な成なりな生せい活くわつ難なんにとらはれてしまつた。といふのは、少年時代せうじに両親しんに死しに別わかれた一人つ子の青木さんは、僅わづかなその遺産ゐさんでどうか修しう学がくだけは済すましたものの、全く無財産むざいさんの身みの上だつた。で、新しん婚こん生せい活くわつは七十円足たらずの月給ききふで始めはじめられたが、間まもなく女の子おんなこが生なれた上に、世せ間的てきなな物價騰貴ぶつかとうきで、その後ごの暮くらしはだんくく苦くるしくなるばかりだつた。そしていつとなく青木さん夫婦ふうふは、かつては夢ゆめにも想さうぎ像うしなかつた質屋しちやの暖廉のれんくぐりさへ度たび重かさねずにはゐられなくなつてしまつた。

「いやだいやだ。僅かな金で月々こんなみじめな思ひをさせられるなんて……」

月末が近づくと、青木さんはいつも暗い顔付でそんな事をつぶやきながら、ため息づいたり、いらだつたりした。そしてそんな時、人のいい《き》の弱い奥さんは何の詞もなくたゞまぶたをうるませてゐるばかりだつた。

相当な身柄の家に育つただけに青木さん夫婦は相方共に品のいい十人並な容姿の持主で、善良な性格ながらまた良家の子らしい、矜持と、幾らか見えを張るやうな質もそなへてゐた。で、世間眼にすれば、どこにも生括に苦しんでゐるらしい様子は感じられないのであつたが、もとより切りつめた、

地道ぢみちな所しよ帯持たいもちなどには全くならされてゐない二人にとつては、それだけにその苦くるしみや不快くわいさが一いっそう深ふかかつた。とりわけ空想きやう家で何なにかの趣味しゆみ道楽だうらくなしには生きられない青木さんにとつては、ただ金かねに追おはれてばかりゐるやうな、あくせくした日々ひびの生せい活くわがむしろのろはしいくらゐだつた。しかし、月給きふの上うへる見込みこみもなかつたし、ボオナスも減へるばかりの上に、質屋しちやや近ちかしい友達だちからの融通ゆうづうもさうさうきりなしとは行ゆかなかつた。結局けつきよく、このまゝ暮くらし続つづけて行ゆくとしたら？ さう考かんへた時とき、二人はせうさうをはげしい心かんに感かんじた。

「やつぱり金だ。少すこしでも生せい活くわつに余裕よゆうのつけられるやうな金かねが欲ほしいな。」

表面へうめんにこそ見みせなかつたが、青木さん夫婦ふうふの頭あたまにはさういふ思おもひがいつも一杯ばいだつた。

そこへ突とつ然ぜん一つの誘い惑わくとして現あらはれたのが、政府せい発はつ行かうの△△債さい券けんを買かふ事ことだつた。それはある日会社きもち持つを強つよく刺しげきした。悲運ひうんな者ものにめぐつてくる時ときならぬ福運ふくうん、そんな事ことまでがしきりに考かんへられた。そして、奥おくさんの熱心ねつな賛さん成せいを得えた上で、苦くるしい内うちから漸やうく工面めんして、非ひ常じやうな期待きたいとともに買かひ求もとめたのが、ちの一万二千三百七十五号がうといふたつた一枚まいの、その△△債さい券けんなのであつた。

背広せびろを軽かろいセルのひと衣かへにぬぎ換かへて、青木さんが奥おくさんと一しよ緒しょにつましやかな晩ばんさんを済すましたのはもう八時じちか近くであつた。青

木さんはすぐに縁の籐イスに身を寄せて煙草をふかしながら、夕刊を読みはじめた。やがて台所の片づけ物を済ました奥さんは次の間に寝かしてある子供の様子をちよつと見てくると、また茶の間へはいつて、障子近くに引きよせた電燈の下で針仕事にとりかゝつた。静かなよひで、どことはなしに青葉の香をにほはせたかぐはしい夜風が庭先から流れてくる。二人の間にはそのまま暫らく何の詞も交されなかつた。

「ほんとに持のいゝ晩だな。」

間もなく夕刊を縁に投げ出した青木さんはさうつぶやきながら、奥さんの方を振り返つた。

「ええ、ほんとにね……」

おく
奥さんは針の手を休めて、靜かに答へた。

せつな
剎那に、二人の口元には何とない微笑が流れあつた。さつきま
での 持の 興奮はいつとなくさめかかつてゐたが、それは心の
きもち こうふん
どこかにまだほのかな明るさを投げてゐた。そして二人は暗黙
の内にもお互が何物かの中にびつたりとけあつてゐるやうな、
たがひ なにももの
その日頃ごころにない甘い、しみじみした幸福感をそれぞれに感じてゐ
た。言葉はそれなりに途切れて、青木さんは庭の暗やみの方に眺
ことば
め入り、奥さんは針の手を再び動かさはじめた。

「でもね、あなた？」

おおく
やがて奥さんはまた口を切つた。

なに
「何？」

「あれ、ほんとにあたるでせうか？」

「さあ、そりや分らない。すべては運命うんめいの神様かみさまの御意ぎよいのまゝ、
なんだからな。」

青木さんはちよつときびしきうな表へうじやう情じやうでいつた。

「だつて……」

「いや、だからさ。僕はやつぱりあたるものと信しんじるな。信しんじる
だけでも、今の僕達ぼくたちには楽たのしいんだからね。ははははは……」

青木さんはうつろな声こゑで笑わらつた。

「ええ、そりやほんとにさうね。」

奥さんおくは一は心に針はりを動うごかしながら、うつ向むかいたままさういつた。

「でも、若もしほんとにあたつたら？」

「そりやうれしいね。飛びあがつて、

《きちが》ひのやうに

おどりまはるかも知れないよ。」

青木さんの声は何となく上ずつてゐた。そして、わざとらしいはしやぎ方で身體をゆすぶりながら笑つた。

「だがね、うれしいどころか、反対に凄くなりやしなやか知ら

？ 一等等だと二千元——僕の二年分の給料以上のお金がいきなり懷に飛びこんでくる……」

そこで言葉を途切つて、青木さんは不意に眞顔になりながら、ちつと奥さんの顔を見詰めた。

「何だかこはいやうね。——さうさう、いつかあつたぢやないの？ 千円かの無尽にあたつて発狂したといふおぢいさんが：

…」

「はははは、僕達ぼくたちはそんなに 《き》が小さかあない。しかし

いいな。今それだけのお金があつたら……」

「ほんとにさうね。あたしお借りかしてある方かたのを、一番にお返かへし
したいわ。」

奥おくさんは針はりの手てを無意識むいしきなやうに膝ひざに休めて、ほの白んだ、硬
張はつた顔かほを青木あおきさんの方ほうに向けながら、真劍しんけんな声こゑでいつた。

「そりや無論むろんだね。」

青木あおきさんは強つよく相槌あひ打うつた。

「それから、あなたどうなすつて？」

「さあ、ヴィクタアを買かふね。武井たけの持もつてるやうな……」

「ええ、ヴィクタアはいいわ。ずるぶん欲しがつてらつしやるんだから。——あたし、何にしようか知ら？」

「君の欲しいのはやつぱり着物かな？」

「あら、着物なんかいらなくつてよ。——さうね、あたしの今一番欲しいのは上等の乳母車よ。ほらキルビイさんのお宅にあるやうな。あたし 《れい》 子をあんなのに乗せてやりたいわ。」

「しかし、乳母車なんてお安い御用さ。」

「それから、柳のイスやテエブルを一組と、茶だんすのいいのを欲しいわね。」

「さうださうだ。イスやテエブルは第一番だな。だが、さうなると、紅茶器なんかの上等も欲しくなる……」

「あら、それぢやきりが無いわね。」

奥さんおくは朗かな声こゑで笑わらつた。

そのまま暫しばらく詞ことばは途切とぎれた。青木さんあおきも奥さんおくも明あるい、楽たのしげな表へうじやう情じやうで、身動みうごきもせぜずに考かんがへこんでゐた。

「でもね、美奈子みなな。二千円ふたごひやくえんあつたら、どうにか家うちが建たてられるかも知しれないよ。そしてそんな一つ一つの品物ものなんかよりも、考かんがへてみりや、その方ほうがずつと根本こん本てき的な事ことだと思おもふ……」

「ああ、ほんとにさうだわ。幾いくら道具だうぐが立派りつぱだつたつて、こんな家うちぢやあね……」

奥さんおくはあたりを見みまはしながらさういつてやんちやらしくひよいと首くびをすくめた。

「で、建てるとなると、やつぱり郊外ね。」

「うむ、そりやさうだとも。大井だの目黒だの。僕すきだな。あすこら辺のちよつと高みに、バンガロオ風の家でも建てられたら、どんなにいいか知ら？」

「とても素適だわ。」

奥さんは高く声をはづませた。

「全く悪くないね。間数はと？ 僕の書斎兼用の客間に君の居

間、食堂に四畳半ぐらゐの子供部屋が一つ、それで沢山だが、

もう一つ余分な部屋が二階にでもあれば申分なしだね。そして庭

はなるたけ広くとつて芝生にする。花壇をこしらへる……」

「あたし、野菜畑も作りたいわ。」

「いいね。普通の野菜物は無論として、外にトウモロコシだのトマトウだの、トマトウのとり立てつて、ほんとおいしいからな。」

「さうね。それからダリヤも思ひつ切り植てみたいわ。」

「うむ、六七月頃になると、それを切花にして客間に飾る……」

「ああ、どんなに奇《きれい》でせう？」

奥さんは黒未勝ちな、若々しいひとみを夢見るやうに見張りながら、晴れやかにつぶやいた。

言葉はまた暫らく途切れた。と、程近くのイギリス人の家ですとなく鳴りはじめたピアノの音が、その沈黙をくすぐるやうに間遠に聞こえてきた。それに聞くともなく耳を傾けながら、

青木さんは靜に煙草をふかし、奥さんは針の手を休めたまま、互にうつとりと今までの空想の跡を追つてゐたが、その空想はなぜかだんだんに影を薄めて行つた。そして、二人の意識の中にはたつた三間しかない古びた貸家である自分の家が、ほんとに猫の額ほどの庭が、やつとの思ひで古道具屋から買つて、ただ一脚のトイスが、いや、あまりにもそれとかけ隔たつたさういふみじめな現実のすべてがうつすりともみがへつてた。

「さうさう、それからねえ……」

やがて青木さんはその冷やかな現実の意識を逃れようとするやうに、新たな空想をゑがきながら、奥さんを振返つた。

「何？」

「さうなつたら、何か小鳥も飼はうぢやないか？ カナリヤ、目白、いんこ……」

「ええ、それもいいわね」

奥さんの声にはもう何となく張りがなかつた。そして、そのままひざに視線を落とすと、思ひ出したやうにまた針の手を動かす始めた。

「しかし、いいな。若しすべてがそんな風に行つたら、ほんとにどんなに楽しい、どんなに美しい生活だか知れないな。——
一日でもいいから、たつた二日でもいいから……」

青木さんはふと一人言のやうにさうつぶやいて、軒先に見える晴れた夜空をちつと見上げた。が、さういふ空想の明るさとは反

んたい
対に 持は妙に暗く沈んで行つた。

おく
奥さんは青木さんのさういふ 持をすぐに感じた。そして、青

木さんの 横 顔に——夜やみの中に浮んでゐるくつきりした横

ロフェイスル
顔 にちらと視線をそゝいだが、すぐに眼をしばしばさせて、

くちびるをかみながらまたうつ向いてしまつた。

「しかし、そりやさうとして、何とかくじがあたらなものかな

？ 今の僕達には何等だつて構はないんだ。ねえ、さうだら

う？」

青木さんは不意に奥さんの方を見返つた。

「ええ。——ですけれど、もうそんな話しよしませう。あたし何

だか……」

奥さんはうつむいた俣いつた。

「どうしたの？」

「いいえね。幾ら思つてみても、そんな事、あたし達には駄目な
 んですもの……」

奥さんはかすれたやうな声で答へながら、青木さんの顔を見上
 げた。

そのせつなに、奥さんのまぶたに一杯にじんでゐた涙にひよ
 と《き》がつくと、今まで何 《なにげ》なさを装つてゐた青
 木さんの心は思はずよろめいた。青木さんはあわててイスから立
 ち上つた。が、すすり泣きはじめた奥さんの肩に手をかけると、
 また心をつり直しながら、力強く、慰めるやうにその耳元にささ

やいた。

「そ、そんな事考へちやいけない。僕達はせめてさういふ夢でも楽しんでゐたいぢやないか。——それにまた、思ひ掛ない巡り合せで、人にはどんな好運が向いてないとも限らないからね……」

それから半年ほどたつた時、ちの一万二千三百七十五号の△△債券は仲買人を《へ》て、ある田舎の大地主の手に渡つてゐた。青木さん夫婦は僅かな金の融通のために仕方なく手離したのであつたが、それが間もなく五等百円のくじにあつた事は無論知るはずもなかつた。

——一四・四・一八——

青空文庫情報

底本：「旬刊 寫眞報知 第三卷第十二号」報知新聞社出版部

1925（大正14）年4月25日発行

初出：「旬刊 寫眞報知 第三卷第十二号」報知新聞社出版部

1925（大正14）年4月25日発行

※UCV3は、「未」の「二」に代えて「三」と「未」の統合を規定していますが、この規定は誤りとみて、外字注記にはUnicodeを記入しませんでした。

入力：小林 徹

校正：鈴木厚司

2012年3月28日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

夢

南部修太郎

2020年 7月13日 初版

奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>